

# 絵手本における中国仙人の一考察

## 一 林守篤の『画筌』を中心に

張 小 銅

江戸時代の浮世絵に多くの中国画題が取り入れられている。なかでも中国仙人の画題が多く取り扱われていた。たとえば、費長房、琴高、子英などの画題は多くの絵師たちに好まれ、よく描かれていた。中国仙人のイメージは通常絵手本より参考されたものが多く、絵師たちがそのイメージを受容する過程で大きく左右されていた。従って、絵手本の研究を通して中国仙人の受容と変容の過程を解明するのに極めて重要なことだと思われる。ここで、林守篤の『画筌』を手掛かりとして、中国仙人に対し一考察を加えたいと思う。

### 一、林守篤の『画筌』について

林守篤について生卒不詳で、詳しいことはよくわからない。ここでは、便宜のために、仲田勝之助氏の『繪本の研究』の内容を次のように引用しておく<sup>1</sup>。

編者守篤は探幽の孫弟子に当たるもので、名は守篤、號は魯軒、筑前直方の隠士、狩野探幽の四天王の一人なる小方幽元守房の門人である。幽元に學んでその傳を得て以来、思ひを丹青に寓すること多年、乾々として勤めて倦まず、本書を著すに至ったのだとある。九州の地に僻在してこの編をなせる篤志は實に賞すべく、狩野派特に探幽の派がいかに地方にも瀾漫してゐたかを知るにも恰好の資料である。と同時に守国春卜等の著と等しく、刻本とした場所が浪華である事は、當時の文化の中心が大阪の地にあった事を證すといふべく、又注意に値しよう。

『画筌』という本は後の坂崎坦氏研究によって、土佐派の土佐光起の『本朝畫法大傳』より剽竊したものであることが明らかになった。坂崎氏は『日本畫の精神』に次のように述べている<sup>2</sup>。

實はこの書の主たる論文は本朝畫法大傳に據ってゐるのである。例へば開卷第一にある六法、三品の説明は光起の解釋その儘であつて、違つてゐる點は幾らか省略して分りにくくなつてゐるまでのことである。製作楷模や觀山水賦は單なる直譯であるからこれは問題にしないとしても、この著者の創建の如く見られる畫論傳受祕事口訣が、矢張り本朝畫法大傳中の畫論祕訣及び彩色の二項目をそっくり借用したものであるのには驚く外はない。而も著者は凡例に於いて「所謂畫論傳受之篇、師小方守房常談于門人之語也、辭固卑陋畫學祕要在此篇豈可不盡心哉」と斷つて居るのは甚だ心得難いことである。守篤の師幽元は探幽の直弟子であるから、幽元の説は即ち探幽の説なりとするも差し支えない譯であるが、探幽程の名家が対立してゐる土佐派の家傳を我物顔に使ふなど、考へも及ばぬことである。して見るとこれは恐らく幽元が守篤かが本朝畫法大傳の祕書なる事を幸ひとして、擅に自派の畫論として吹聴したものと推しても間違ひはないであろう。筆者は念のため畫道要訣と畫筌との比較を試みて見たが、此方からは全く何物をも借出してゐない。思ふに安信の畫論は佛理的で高踏な論文であるため、初學入門には不適當とせられたのか、それとも極祕が保たれたものであるか何れとも判じ難いが、これを引き換へて光起の畫論は説明は明快であり、又畫法の実際を説くこと詳かで重實此上もないため、利用される結果に立至つたものと考えられる。要するに狩野のお家藝を傳へたと稱する畫筌は、實は土佐家の畫論であつたのは甚だ皮肉である。

ただし、『画筌』の絵の部分については、ほとんど狩野探幽や幽元の絵を謄写したもので、本研究に大きな支障にはならない。仲田勝之助氏の統計によると、

粉本として卷二に山水草木、卷三に鳥獸、卷四に漢人物、卷五に和人物を収め、元信、光信、安信、探信等の筆に成る縮圖も交つてゐるが、大部分は探幽及び幽元の筆で、筆勢を謄寫したりといへども、之を春卜等のそれに比ぶれば、唯その一斑を示せるのみで、多くは輪郭を描いたものに過ぎぬ。全四百五十圖ばかりの内、漢人物百四十七圖最多く、これに次いで鳥獸百十九圖、山水花卉百〇八圖で、和人物七十五圖が最少ない。

という<sup>3</sup>。漢人物の百四十七図の中には、中国仙人は四十八図あると考えられる。従つてこの四十八図は今回の考察の対象となる。

## 二、林守篤の『画筌』における中国仙人関係の資料

### 1、明・王世貞の『有象列仙全傳』

王世貞（1526～1590）は、字は元美といい、また自ら鳳洲、弇州山人を号とする。世貞は太倉の生まれで、子供の頃から聡明で記憶力が抜群であった。およそすべて読んだ書物は生涯忘れることはない。『明史』巻二百八十七によると、彼は嘉靖二十六年（1547）十九歳（数え年）の時に、科挙の試験を受け、見事に合格し、進士に及第して刑部主事という官職を与えられた。後に郎中、員外郎などを歴任したという<sup>4</sup>。王世貞は西漢の文章や盛唐の詩を尊い、古文辞派の旗振り役として文壇に大きな影響を与えた。彼は李攀龍と共に盟主として明代の文壇を支配していた。李攀龍が亡くなった後も、二十年間にわたって盟主の地位を維持し続けた。

『有象列仙全傳』は万暦二十八年（1600）に刊行されたものである。その著者は王世貞とされているが、校正者は汪雲鵬氏であるので、実際に編纂したのは汪雲鵬氏という説もある。この『有象列仙全傳』には五百八十一人の仙人が載っているが、中には百八十五図の仙人図像がある。『画筌』の「凡例」には『有象列仙全傳』が引用書目として取り上げている。

### 2、明・洪應明の『仙仏奇踪』

『四庫全書總目』巻一四四によると、洪應明は明の万暦年間（1572-1620）の人であり、字は自誠、号は還初道人である。その生まれるところは不詳である。『仙仏奇踪』は万暦三十年（1602）に完成したのである。前の二巻は仙人についての記述で、老子から張三丰まで計63図ある。仙人の二巻は名付けて「逍遙墟」という<sup>5</sup>。

『仙仏奇踪』の前に「逍遙墟引」という序文があり、作者は袁黄という人である。清・陳田『明詩紀事』庚籤巻十五によると、袁黄の字は了凡、また坤儀という。浙江嘉善の生まれである。万暦十四年（1586）に科挙の試験を受け、進士に及第した。彼は寶坻知県、兵部主事を歴任した。著書に『兩行集』があるという<sup>6</sup>。

『仙仏奇踪』は清の光緒十三年（1887）に上海の掃葉山房によって『繪像列仙傳』という書名に改め、再び刊行された。書中の袁黄の「逍遙墟引」が「仙引」に変えられただけで、中身はそのままであった。図像については『繪像列仙傳』は55図あり、『仙仏奇踪』より少ない。

『仙仏奇踪』と『画筌』との関係について、『画筌』の「凡例」の中には引用書目として

明言しなかったが、小林宏光教授の考証によって明らかになった<sup>7</sup>。

### 3、明・王圻・王思義の『三才図会』

『雲間志略』巻十八によると、王圻（生卒不詳）は、字は元翰、号は洪洲といい、上海の生まれである。王圻は三歳に字を読め、四歳に本を読め、七歳に礼記を学び、十四歳に儒学生になり、十六歳に官費生になった。経・史・百家の書物を熟読し、博学の人物であった。『明史』巻二百八十六によると、王圻は嘉靖四十四年（1565）に科挙の試験を受け、進士に及第した。彼は清江県、万安県の知事を歴任した後、御史に抜擢された。しかし彼は時の宰相の逆鱗に触れ、福建の按察僉事に転出され、さらに邛州の判官に左遷された。その後、進賢県、曹県の知事、開州の知事をつとめ、最後に陝西布政参議をもって辞めたという<sup>8</sup>。

王圻は晩年淞江の畔で居を構え、著述に専念していた。著書に『續文献通考』、『稗史彙編』、『兩浙誌』、『古今考』、『洗冤録』などがある。王思義は王圻の次男であり、官職に就かず生涯著述業に専念していたとのことである。

『三才図会』は万曆三十七年（1609）に刊行されたものだが、『三才図会引』によると、実際には万曆三十五（1607）に完成したものである。この本は、王圻と次男思義と共同で編集したものであり、明代の代表的な類書の一つである。特に図柄が豊富のため、清の大型叢書『古今圖書集成』も『三才図会』の内容を多く取り入れた。『三才図会』には人物図が十四巻あり、計六百四図ある。『画筌』との影響関係について、『画筌』の「凡例」の中には引用書目として明言しなかったが、その影響の可能性は小林宏光教授によって指摘された。

以上の三種の資料と『画筌』との関係について、『一覧』をまとめてみた（『付録』をご参照）。それに基づき、次のことを指摘することができる。

（1）『有象列仙全傳』の影響について、22図（『対照（以下『一覧』と略す）一覧』1～22）が『画筌』と完全に一致し、1図（『一覧』23）が『画筌』と部分的に一致し、合わせて23図の影響関係が確認できた。小林教授は24図が影響関係があると指摘し、23図の内容を具体的に挙げたが、もう1図は不明である<sup>9</sup>。23図の中には、「王武士」に該当する人がなく、おそらく「武志士」の間違いであろう。また「簫簪」についても構図が異なるため、両者の影響関係が認められない。

部分的に一致とされる「馮長」という図像は、仙人馮長が立って読書している姿だったが、『画筌』には正座の姿になっている。しかもその正座の姿はやはり『有象列仙全傳』の

「姚光」（『一覽』23の備考をご参照、これも小林教授によって明らかにされたものである）という図像を模ったものである。すなわち、絵手本が中国仙人を受容する段階ですでに変容の現象が見られたのである。

さて、林守篤はなぜ「正座」の姿勢に変容したのであろうか。それはおそらく朱子学の正統思想の影響だろうと推測される。古代の中国人は読書の姿勢を大変重視していた。特に宋代（960-1279）以後、「正座」で読書することが強調される。朱子は『朱子語類』の「読書法」に「斂身正坐」（身だしなみを整え背筋を伸ばして腰かけに座って）で読書することを提唱した。彼はまた例として蘇軾を取り上げ、蘇軾が聖人の書物を読んだ時に終日正座して勉強したという。後の眞徳秀も『西山読書記』の「読書法」に「衣冠正坐」で読書することを提唱した<sup>10</sup>。江戸時代には朱子学が日本の思想界に支配的地位を占めていたので、朱子が提唱した「正座」での読書法も日本に影響を与えていたと想像される。『画筌』に見られる変容は狩野派の一員として林守篤の正統思想の表れであるかもしれない。ただし、宋代には机や椅子がすでに日常生活に欠かせない家具となっていたので、朱子が言った「正座」の意味は必ずしも江戸の人々が理解した量上での「正座」ではない。

なお、『有象列仙全傳』が『画筌』と共通の画題を持ちながら、影響関係が見られないのは12図（『一覽』24-35）ある。

（2）『仙仏奇踪』の影響について、6図（『一覽』36-41）が『画筌』と完全に一致していることが確認できた。1図（『一覽』45）が基本的に一致しているが、顔の表情が異なる。また、『仙仏奇踪』が『画筌』と共通の画題を持ちながら、影響関係が見られないのは5図（『一覽』31-35）ある。

（3）『三才図会』の影響について、9図（『一覽』36-44）が『画筌』と完全に一致していることが確認できた。中には6図（『一覽』36-41）が『仙仏奇踪』とも完全に一致しているので、『画筌』が完全に利用したのは3図（『一覽』42-44）であると言ってよからう。

ここで指摘しなければならないのは中国資料間の関係である。『仙仏奇踪』と『三才図会』はともに『有象列仙全傳』から取り入れた図像がある。たとえば「費長房」について、構図的に『有象列仙全傳』の流れに間違いない。

列仙全傳	仙仏奇踪	三才図会
		

(4) 前掲の中国資料と完全に共通画題を持たないのは3図(『一覽』46-48)である。小林教授は呂洞賓、張果、琴高、蝦蟇、鉄拐、麻姑、劉安、孫登、丁令威、盧敖(敖の誤り)、慈童といった12図は狩野派の図像によるものだと推測している<sup>11)</sup>。

### 三、問題点と今後の課題

ここでは、問題はやはり影響の痕跡が見られない画像である。この部分はほかの中国の書物を参考した可能性がまだ残っているかもしれないが、中には和製漢画の画題がある。たとえば、前掲の慈童、上利剣(『一覽』47-48)は存在しない。従って中国の影響はないと思われる。また、同じ画題であっても構図的には異なる。たとえば、張果、蝦蟇仙人、丁令威はそれである。その原因は江戸の人々の思い込みがあると推測される。たとえば、江戸の資料には次のような記述がある。

#### ① 蝦蟇仙人について

- ☐ 蝦蟇先生なども列仙傳にすなはち侯先生といへるかへる也、其身元来かへるの事なれば小かへるなどもさぞ愛し申されたるべけれど、ゑにかきたるとは少しもやう違也、成程繪にかへるばかり書てはわかちがたし、ゑそら事の尤なる也今の世にもへびつかひはあれどかへるつかひはない<sup>12)</sup>。(石野廣通『繪そらごと』)
- ☐ 蝦蟇仙人三足(足?)の蝦蟇を愛したると云こと諸書に見へず、劉海蟾なりと云人あれとも其傳にはあたらざるなり、常州吉田薬王院に陳竹州と云人の蝦蟇仙の圖あり<sup>13)</sup>。(立原翠軒『此君堂後素談』)
- ☐ 劉海愛蟾圖 劉海蟾唐末人陽子を師とす白き三足のかへるを愛す後終南山に入

て霍に乗て天に上る<sup>14</sup>。(狩野一溪『後素集』巻二[1813])

② 丁令威について

□ 丁令乗霍圖 丁令威霍に乗遼東の鳥居の上に来<sup>15</sup>。(狩野一溪『後素集』巻二)

3 張果老について

□ 張果が白駒に乗たことはあれど瓢のうから駒を出した事、列仙傳には見へねどもむかしより世にいひつたふところなり<sup>16</sup>。(石野廣通『繪そらごと』)

以上の資料を見る限り、①の蝦蟇仙人については、侯先生と解釈したり、劉海蟾と解釈したり、劉海と解釈したりする。これに対し、『有象列仙全傳』には二人は侯先生と劉海蟾との記述がある。次に見てみよう。

(1) 侯先生

侯先生。不知何許人。宋大中間。貨藥京師。年四十餘。無須眉。而留贅隱隱遍肌體。嘗醉。夜即與乞丐同處。有馬元者。夏月隨之出閭闔門。侯浴池中。元因就視。乃一大蝦蟆。元遽退隱。侯浴出著衣。元前揖之。侯笑曰。子適見我忽。乃召元飲酒肆中。出藥一粒曰。服之。壽百歲。自此不復見。有自蜀中來者。見其貨藥於市<sup>17</sup>。(侯先生はどういう人なのかはよく分からない。宋の大中年間、都で薬を売っていた。年は四十余りで、髭がない。瘤のようなものはかすかに体中にある。かつて酒酔いとなると、夜乞食たちと一緒に寝る。馬元という人がいた。夏の月夜に城外にぶらぶらしていたところ、ちょうど侯先生が池の中で水遊びをしているのを見かけた。よく見ると、大きな蝦蟇であった。元は急ぎょ逃げて隠れた。侯先生は池から出て服を着た後、元は前に行って侯先生に挨拶した。侯先生は笑いながら言った。「君は私を見かけたでしょう」と。そこで居酒屋まで誘い、一粒の薬を出して言った。「これを飲んだら百歳まで生きられます」と。その後二度と姿を現すことがなかった。蜀から来る人の話によると、彼が市場で薬を売っているのを見かけたことがあるという。)

(2) 劉海蟾

劉海蟾。汲郡白鶴觀知事崔重微。忽見道人謁於堂下。揖之坐。不語。但微哂。重微起。取金相贈。未入房。已聞弄筆聲。急回視之。已失道人。壁間有題字。以仙書證之。乃秦人劉海蟾之筆<sup>18</sup>。(劉海蟾。汲郡の白鶴觀の執事崔重微は、ある日突然来訪の道人を見かけて対応した。互いに挨拶して腰をかけると、黙っていた。ただ少し笑っているだけであった。重微が起きて部屋に戻って金を取ってしようとしたが、後ろに字を書いている

音が聞こえた。あわてて振り返ってみると、道人は見失った。壁には字が残っている。重微は仙書を持ってきて、照らし合わせてみると、秦の人劉海蟾の筆跡であった。）

また「劉海愛蟾」については清の《古今圖書集成》（經濟彙編考功典卷二百三十一燈燭部雜錄六）に次のような記述がある<sup>19</sup>。

熙朝樂事。正月十五日爲上元節。前後張燈五夜。相傳宋時止三夜。錢王納土獻錢買添兩夜。先是蠟後春前。壽安坊而下。至衆安橋。謂之燈市。出售各色華燈。其像生人物。則有老子。美人。鍾馗捉鬼。明月度妓。劉海戲蟾之屬。（康熙朝の楽しいことは、正月十五日の上元祭りである。その前後五日間提灯を掲げる。伝える話によると、宋代の頃はわずか三日間の夜だったという。錢王様は土と金を奉納して二日間を増やした。まずは蠟月立春の間に、壽安坊から衆安橋までは提灯の市と呼ばれ、いろんな華やかな提灯が売り出されていた。提灯にはいろんな絵柄が描かれている。人物には老子、美人、鍾馗鬼を捉え、明月舞妓を思い、劉海蟾を弄びの類がある。）

なお、三足の蝦蟇について宋の謝維新の《古今合璧事類備要》（卷八十九）に次のような記述がある<sup>20</sup>。

蛙。蝦蟆也。數種。有黑虎。有蚯黃。有黃蛄。有螻蛄。有蟾蜍。有山蛤。〔中略〕蟾蜍形大背黑。無點多疵。磊其腹下。有丹書八字。頭有肉角。世傳三足者妄也。（蛙は蝦蟇のことで、数種類がある。黒虎あり、蚯黄あり、黄蛄あり、螻蛄あり、蟾蜍あり、山蛤ある。〔中略〕蟾蜍の形が大きく、背が黒い。斑点がないが、あせもののようなものが多い。その腹の下には赤い色の八という文字があり、頭には肉の角がある。世に伝えられている三足は嘘である。）

以上の資料を見る限り、蝦蟇仙人は侯先生、劉海蟾、劉海といった三人は別々の存在であることが分かった。中には劉海蟾を弄びという絵柄は少なくとも康熙朝（1661～1772）にはすでに上元の提灯祭りの絵柄の一つとして提灯に描いていた。また三足のカエルについても俗説として当時の中国に存在していた。ちなみに「劉海愛蟾」（または「劉海戲蟾」）の図柄は中国の年画によく見られる。清代の年画にはすでに三足の蝦蟇がかか



れている。従って蝦蟇仙人については、影響の要素がはるかに複雑であり、また別の機会  
で考察したい。『画筌』の蝦蟇仙人については、どの資料に基づき描かれたのかもまだ考察  
する余地があると思われる。

②の丁令威について、中国の資料に次のような記述がある。

(1)『搜神後記』卷一

丁令威、本遼東人。學道於靈虛山，後化鶴歸遼，集城門華表柱。時有少年舉弓欲射之，  
鶴乃徘徊空中而言曰，有鳥有鳥丁令威，去家千年今始歸。城郭如故人民非，何不學仙塚  
壘壘。遂高上冲天。今遼東諸丁云其先世有升仙者，但不知名字耳<sup>21</sup>。(丁令威はもと遼東  
の人で、靈虛山で仙道を学び、後に鶴に化け遼に帰り、城門の華表（鳥居のようなもの）  
に止まった。ある少年が弓で丁令威を射ち落そうとしたが、鶴が空を廻旋しながら、「鳥  
の名前は丁令威で、家を去って千年になり、今やっと故郷に帰ってきた。町は相変わらず  
だが、人々は変わりました。なぜ仙道を学んで不老不死を求めないだろうか」と言った。  
遂に大空を飛んで行った。今日遼東の諸丁氏の話によると、先祖に仙人になった人がい  
た。しかし名前は知らないという。)

(2)『有象列仙傳』

丁令威、本遼東人，學道於靈虛山。後化爲白鶴歸。集華表而吟曰，有鳥有鳥丁令威。去  
家千歲今來歸。城郭如故人民非。何不學仙塚壘壘<sup>22</sup>。(丁令威は本来遼東の人であり、靈  
虛山で道を学んだ。後に白鶴に化けて帰ってきた。華表に止まって言った。「鳥、鳥、丁  
令威のことであり、家を去って千年になり、いまや帰ってきましたが、町は相変わって  
いないが、人民は変わりました。なぜ仙道を学んで不老不死を求めないでしょうか」と。)

いずれも丁令威本人が鶴になり華表に止まった記述であるが、『画筌』には丁令威が鶴に  
乗っていると絵柄に変わった。

③の張果老について、中国の資料は次のように記述している。

(1)《太平廣記》卷三十

張果者。隱於恆州條山。常往來汾晉間。時人傳有長年秘術。[中略]果常乘一白驢。日行數萬里。休則重疊之。其厚如紙。置於巾箱中。乘則以水噴之。還成驢矣<sup>23</sup>。(張果というものは恒州条山に隠居していた。常に汾晋の間に行き来した。その間に人に不老不死の秘術を学んだ。[中略]張果は常に白い驢馬に乗り、一日数万里を走る。休むとロバを畳んでしまう。その厚さは紙のようである。小箱に締まっておく。乗る時に水で吹きかけると、また驢馬に変わる。)

## (2)《有象列仙全傳》卷五

張果。隱於恆州中條山。往來汾晉間。得長生秘術。耆老云。爲兒童時見之。已言數百歲。乘一白驢。日行數萬里。休息時折疊之。其厚如紙。置於巾箱中。乘則以水噴之。復成驢<sup>24</sup>。(張果は恒州中の条山に隠居していた。常に汾晋の間に行き来した。不老不死の秘術を習得していた。地元の老人たちが言う。「子供の頃見かけたことがあります。その時張果は自分がすでに数百歳になったと言いました。」と。一匹の白いロバに乗り、一日数万里を走る。休むとロバを畳んでしまう。その厚さは紙のようである。小箱に締まっておく。乗る時に水で吹きかけると、また驢馬に変わる。)

いずれも張果老が白い驢馬に乗り、必要でない場合には紙のように畳んで小さな箱に入れる。乗るときには水で吹きかけると、また驢馬に変わるという記述である。『画筌』には張果老が瓢箪からロバを出すという絵柄であった。

以上、三つの例を考察してみたが、以下の三点を指摘することができる。

第一には、江戸の人々が中国仙人の画像を受容する際、必ずしも中国の原典通り受け入れなかった。その原因は必ずしも彼らの中国原典に対する誤解ではなく、むしろ意図的なものであった。たとえば「蝦蟇仙人」「丁令威」についていえば、仙人が蝦蟇や鶴に変身した構図から、仙人と動物という構図関係に変わった。前掲の石野廣通が『繪そらごと』で指摘したように、「繪にかへるばかり書てはわかちがたし」と、絵でわかりやすいように多少の構図の変更が必要だったかもしれない。











第二には、その意図には自分の漢学の学識を自慢することが見え隠れている。たとえば谷文晁は『文晁畫談』で「世に鶴に乗りたるを費長房といふ、傳中に杖を龍として、費長房を乗せたことはあれども、鶴のことなし、又先年或歳官家より出たる顔輝が鉄拐仙の

圖を見る、散髪破衣にして、手に長き劔を提げたり、此劔も傳の内に見えず、いぶかしく思ひしが、其後好古堂書畫記に、馬遠の李鉄拐磨劔圖あるを見出で、はじめて慥になりぬ。」と述べ、費長房が鶴に乗るという原典こそ指摘しなかったものの、杖に鉄拐李の構図よりも一般的にあまり知られていない劔を研ぐという稀な画例を取り上げて強調している。前の「蝦蟇仙人」という画題に、わざわざ「劉海愛蟾」の絵柄を取ったのも、その意図だったと推測される。
















第三には、このように変形した漢画の構図はさらにパターン化される傾向がみられる。これは前掲の三例だけではなく、他にも多く見られる。たとえば、費長房は竹の杖ではなく鶴に乗る構図も型として定着するようになり、後の鶴に美人の原型となった。従って、意図的変形から、さらに型を定着させる過程は、江戸の人々の異文化を受容する際、彼らの好みにより、取捨を左右することが多かったと考えられる。








【付録】：『対照一覧』

No.	仙人	画 筌	列仙全傳 (1600)	仙佛奇踪 (1602)	三才図会 (1607)	備 考
1	王子喬					
2	老子					
3	陳楠					
4	王喬					

5	劉女					
6	謝仲初					
7	涓子					
8	王倪					
9	王處 (王處一)					
10	子英					
11	武志士					


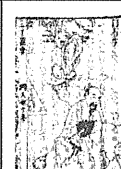
12	葛由					
13	樂巴					
14	鄭思遠					
15	苗龍					
16	張志和					
17	張三丰					
18	重陽子 (王嘉)					



19	明崇儼					
20	羅子房					
21	郝大通					
22	控鶴 [仙人]					
23	馮長					
24	琴高					
25	劉安					

26	蝦蟇 [仙人]					
27	簫臺					
28	丁令威					
29	張果					
30	梅福					
31	麻姑					
32	黃初平					

33	鉄拐李 (鉄拐先生)					
34	呂洞賓 (呂巖)					
35	孫登					 嵇康
36	莫月鼎					
37	安期生					
38	李八百					
39	彭祖					



40	何仙姑					
41	尹喜					
42	東方朔					
43	白石生					
44	馬成子					
45	浮丘伯					
46	盧敖					

47	[ 菊 ] 慈童					
48	上利剣					

\* 『対照一覧』の図像引用について、下記の通りである。

- (1) 『画筌』(国会図書館所蔵)
- (2) 『有象列仙全傳』(上海古籍出版社影印本、1988年)
- (3) 『仙佛奇踪』(太和館刊本、蓬左文庫所蔵)
- (4) 『三才図会』(上海古籍出版社影印本、1985年)

【注釈】：

1. 仲田勝之助『繪本の研究』(美術出版社、昭和25年5月168頁)
2. 坂崎坦『日本畫の精神』(東京堂、昭和17年7月29頁～31頁)
3. 仲田勝之助『繪本の研究』(美術出版社、昭和25年5月168頁)
4. 王世貞について、清・張廷玉等『明史』卷二百八十七、列傳第一百七十五に次のような記述がある。

王世貞，字元美，太倉人，右都御史忬子也。生有異稟，書過目，終身不忘。年十九，舉嘉靖二十六年進士。授刑部主事。世貞好爲詩古文，官京師，入王宗沐、李先芳、吳維岳等詩社，又與李攀龍、宗臣、梁有譽、徐中行、吳國倫輩相倡和，紹述何、李，名日益盛。(王世貞，字は元美といい、太倉の人である。右都御史忬の子である。十九歳の年に、嘉靖二十六年の進士に及第して、刑部主事に任命された。世貞は詩や古文が好きで、都で務めた頃、王宗沐、李先芳、吳維岳らの詩社に入り、また李攀龍、宗臣、梁有譽、徐中行、吳国倫の輩と唱和する。何、李の詩文論を継承し、さらに名声が上がった。)

5. 洪応明について、清・永瑆等『四庫全書總目』下、卷一四四に次のような記述がある。  
『仙佛奇蹤』四卷，內府藏本。明洪應明撰。應明字自誠，號還初道人，其里貫未詳。是

編成於萬曆壬寅，前二卷記仙事，後二卷記佛事。首載老子至張三丰六十三人，名曰逍遙墟。末附長生詮一卷。次載西竺佛祖自釋迦牟尼至般若多羅十九人。中華佛祖自菩提達摩至船子和尚四十二人，曰寂光境。末附無生訣一卷。仙佛皆有繪像，殆如兒戲。（『仙佛奇踪』四卷であり、内府の蔵本である。明の洪應明の撰である。應明は、字は自誠といい、号は還初道人という。その生まれるところ是不詳である。この本は萬曆壬寅に完成され、前の二卷は仙人についての記述であり、後の二卷は佛についての記述である。前に老子から張三丰まで六十三名で、名付けて「逍遙墟」という。後ろに『長生詮』一卷が付されている。次に西のインドの釈迦から般若多羅まで十九人で、中華の仏教の祖である達磨から船子和尚まで四十二人である。名付けて「寂光境」という。後ろに『無生訣』が付されている。仙仏は皆画像があり、ほとんど子供の遊びのようなものである。）

6. 袁黄について、袁黄については、清・陳田『明詩紀事』庚籤卷十五（周駿富輯明代傳記叢刊015，明文書局015－115頁）に次のよう記述がある。

〔袁〕黃，字坤儀，嘉善人。萬曆丙戌進士。除寶坻知縣。遷兵部主事。有兩行堂集。（袁黄は、字は坤儀といい、嘉善の人である。萬曆丙戌〔1586〕の進士である。寶坻知県、兵部主事を歴任した。著書に『兩行集』がある。）

また、清・查繼佐『罪惟錄列傳』卷十八（周駿富輯明代傳記叢刊086，明文書局086－442頁）に次のような記述がある。

袁黃，字了凡，浙江嘉善人，萬曆丙戌進士。有『史論』及『四書』，極詆程朱，至盡竄註解，更以己意。坐非儒見黜，焚其書。子鼐，天啟己丑進士。（袁黄は、字は了凡といい、浙江嘉善の人である。萬曆丙戌（1586）の進士である。著書に『史論』及び『四書』があり、程・朱を侮辱し、さらに註解まで勝手に改ざんした。そのため、儒学を侮辱した罪で解任され、その本は焼かれて処分された。）

7. 小林宏光「『画筌』卷四漢人物図像考」（実践女子大学文学部『紀要』第32号、146-151頁、1989年）

8. 王圻については、清・張廷玉等『明史』卷二百八十六、列傳第一百七十四、文苑二に次のような記述がある。

同邑有王圻者，字元翰。嘉靖四十四年進士。除清江知縣，調萬安。擢御史，忤時相，出爲福建按察僉事，謫邛州判官。兩知進賢、曹縣，遷開州知州。歷官陝西布政參議，乞養歸，築室淞江之濱，種梅萬樹，目曰梅花源。以著書爲事，年踰耄耋，猶篝燈帳中，丙夜不輟。所撰續文獻通考諸書行世。（同じ故郷には王圻という者がおり、字は元翰という。嘉靖

四十四[1565]年の進士である。清江県と萬安県の知事を歴任し、後に御史に抜擢された。時の宰相の逆鱗に触れ、福建の按察僉事に転出され、さらに邛州の判官に左遷された。進賢県、曹県の知事を二回ほど務めたあと、開州の知事、陝西布政参議を歴任した後、官を辞め帰郷した。淞江の畔で居を構え、梅の木を一万本植え、「梅花源」という。著書の生活を送り、老いてもなお徹夜で読書する。『續文獻通考』などの著書が世に刊行されている。)

なお、『王叅知洪洲公傳』（『雲間志略』巻十八、周駿富輯『明代傳記叢刊』147、明文書局影印本）に次のような記述がある。

王圻。字元翰。號洪洲。上海人也。公生三歲能辨字。四歲能讀書。七歲受戴氏禮。十四爲博士。十六歲而廩于官。凡經傳子史百家。言及性理綱目諸書。無不貫穿淹通。試輒爲諸生冠。〔中略〕公雖老而精神強旺。飲酒賦詩。無異少壯。望者謂爲神仙中人。而享年八十有五。一日。竟以無疾考終。想當仙人去。公居恆教其子孫。嚴義方之訓。而諸子思忠、思義輩。恂恂有萬石家風。其諸孫皆賢而孝廉。昌會負名。世才將起。而嗣公之服且光大之。天之報施善人爲不爽矣。所輯有續文獻通考。稗史彙編。兩浙離志。古今考。洗冤錄。所注有周禮。武經。所著有青浦志。海防志。吳淞江議。洪洲類稿行于世。水利稿。明農稿藏于家。(王圻、字は元翰といい、号は洪洲という。上海の人である。王圻は三歳字を読み、四歳本を読み、七歳戴氏の礼記を学び、十四歳博士となり、十六歳官費の儒学生となった。およそ経・伝・子・史・百家、性理綱目に言及する諸書物は、みな精通する。試験を受けると、いつも首位の成績であった。〔中略〕王圻は老いたが、精力的であった。酒を飲み、詩を賦す。若者のようであった。彼を見た人は皆仙人と言っている。八十五歳で亡くなった。ある日、病氣なく亡くなった。自分は仙人になりたいといった。王圻は子孫の教育に普段から心血を注いだ。諸子の中には思忠、思義などがおり、誠に名家の家風がある。その子孫はみな礼儀正しくかつ親孝行であった。一族には盛名を負い、人材が輩出した。王圻の偉業を継承した子孫は後絶たない。まさに善人にはよい結果が報われる。編集には『續文獻通考』、『稗史彙編』、『兩浙離志』、『古今考』、『洗冤錄』があり、注釈には『周禮』、『武經』があり、著書には『青浦志』、『海防志』、『吳淞江議』、『洪洲類稿』が刊行されたが、『水利稿』、『明農稿』が家藏していた。)

9. 小林宏光「『画筌』巻四漢人物図像考」(実践女子大学文学部『紀要』第32号、1989年、141頁)

10. 拙著『中国人と書物——その文化と歴史』(あるむ、2005年、23-24頁)

11. 小林宏光「『画筌』卷四漢人物図像考」(実践女子大学文学部『紀要』第32号、151頁、1989年)
12. 坂崎坦『日本畫談大観』(目白書院大正6年7月、725頁)
13. 坂崎坦『日本畫談大観』(目白書院大正6年7月、750頁)
14. 坂崎坦『日本畫談大観』(目白書院大正6年7月、566頁)
15. 坂崎坦『日本畫談大観』(目白書院大正6年7月、567頁)
16. 坂崎坦『日本畫談大観』(目白書院大正6年7月、726頁)
17. 明・王世貞『有象列仙全傳』卷七、(中國古代版畫叢刊3、上海古籍出版社1988年8月影印虎玩軒刊本、252頁)
18. 明・王世貞『有象列仙全傳』卷二(中國古代版畫叢刊3、上海古籍出版社1988年8月影印虎玩軒刊本、62頁)
- 19.『古今圖書集成』經濟彙編考功典卷二百三十一、燈燭部・雜錄六(ロンドン大学SOAS圖書館所藏)
20. 宋・謝維新撰、明・夏相校刻『古今合璧事類備要』卷八十九(新興書局影印本、民國58年)
21. 晋・陶潜『搜神後記』卷一(四庫全書子部、小説家類)
22. 明・王世貞『有象列仙全傳』卷二(中國古代版畫叢刊3、上海古籍出版社1988年8月影印虎玩軒刊本、59頁)
23. 宋・李昉等『太平廣記』卷三十(四庫全書子部、小説家類)
24. 明・王世貞『有象列仙全傳』卷五(中國古代版畫叢刊3、上海古籍出版社1988年8月影印虎玩軒刊本、184頁)

付記：

本文は2009年ロンドン大学SOASの国際学会で口頭発表に基づき書きなおしたものである。